

水戸藩志士弔魂碑

朝比奈 知泉（撰文）

松山、中台兩村德川氏時屬幕府直轄、旗下之士中根定之助宰之、

明治維新、設府藩県制、幕領置府県、兩村合為宮谷県、柴山文平任県
県令、里正之稱、名主改組長 大木三右衛門任中台組長、下山九兵衛
任松山組長、佐助翁即三右衛門嗣子也、是時奧羽未平定水戸藩党争餘
焰焰猶焰、朝比奈泰尚、其嗣子泰彙、寛 政布、其子政常、及市川
弘弘美等、率諸生党、元年三月癸水戸、与佐幕諸藩兵転戦越後会津、
九月歸水戸、欲頼貞芳大夫人訴情、不果拋城門外弘道館、健闘乱繫
遂敗退矣、時十月一日也、泰尚率殘卒、由銚子出手八日市場、六日
朝向中台、天狗党進多古街道至松山台、兩軍接戦、互交砲火自己至
午、一恃衆、專頼火器、一決死、須臾且憚竭、大呼求短兵追闘不応、
飛丸如雨、諸生党軍遂全滅矣、遺屍二十有五、其一無首級、戦熄後、
柴山県令命兩吏民、遍搜索、傾涸用水渠、而終不護云、大木、下山
兩組長及中台村長山崎八郎兵衛、中台仁右衛門、松山村長古関佐兵
衛、関忠兵衛等相謀、収戦没二十五人、遺骸葬之、建碑祀焉歲時香
火不絶、以後至今日、大正十四年四月、予与家兄及弟金三郎、始



（写書文責）

至戦跡大木佐助翁導予兄弟、指点邸圃、詳説当年状景、由其戦袍知為宗家父子、其無首者蓋笮政布以其死分明、其首級不伝致干水水戸也、頃者両村有志相謀建吊碑求予記之、予不敏何以当之、顧予亦朝比奈氏一塊肉也、生父与伯叔父従兄皆斃国難、今頼翁審一門奮闘宗家陣没之迹、自非翁年踰古稀、嬰鍊強記安能至此予不得以不文肯辞也、

（以下、殉難士氏名省略）

- 一 菊と葵の花園に
戊辰の風雲急を告ぐ
時に魁け開く梅
白と紅とに咲き分かる
- 二 至誠は一つ道二つ
報恩一途に決起せし
譜代重臣 学徒らも
城を離れて北越路
- 三 望み新たに下総へ
矢弾飛び散る松山戦
異郷に残る勇士像
鎮魂の丘に梅薫る

千葉県八日市場市・水戸藩「諸生派」終焉の地。

『水戸藩志士弔魂碑』文

(口語・訳)

原文(漢文) 朝比奈 知泉 先生・撰文

松山中台村は、徳川氏の時代幕府直轄に属していた。その部下の士であった中野定之助がここを取り締まっていた。明治維新の時、府藩県制を設け、幕府の領地に府県を置いた。両村合わせて宮谷県とした。柴山文平が県令に任じられた。地方の役人の名主を組長に改めた。大木三右衛門を中台組長に任じ、下山九兵衛を松山組長に任じた。佐助ご老人は、すなわち、三右衛門氏の嗣子である。この時、奥羽方面の戦いまだ続いており、水戸藩党争も燃え盛っていた。

朝比奈泰尚とその跡継ぎの子泰葉、寛政布その嗣子政常、及び市川弘美ら兵を率い、明治元年三月水戸を出発して、幕府方の諸藩と共に、越後・会津で転戦し、九月水戸に帰り、城内の貞芳大夫人に頼み、事情を訴えようとしたが、敵方に阻止され目的を果たせなかつた。そこで城外の弘道館に陣を張り、天狗派と激しい砲撃戦となり、諸生軍健闘空しく遂に敗退する。

時に十月一日であった。朝比奈泰尚、残りの兵を率いて、銚子より八日市場に出て六日朝、中台に向かった。敵、天狗派は多古街道を進み、松山台に向かっていた。そこで両軍接戦となり、互いに砲を撃ち合い、それは午前十時から正午まで続いた。諸生方のある者は、土地の人々の協力を頂き、主として砲で応戦した。ある者は死を覚悟しもはや弾もなくなり、抜刀し大声を挙げながら、帯刀している敵を追いかけるが、敵は味方の砲陣に隠れてしまい戦おうとしなかつた。飛び散る弾丸雨霰の中に突入、諸生派遂に全滅する。

戦死体二十五体あり。その一つには首がなくなっていた。戦いが終わった後、柴山県令は両村の村役に命じて、用水堀の水を掃い隅々まで搜索したが、遂に遺体を見つけたことはできなかつた。大木、下山両組長及び中台村長、山崎八郎兵衛、中台仁右衛門、松山村長、古関佐兵衛、関忠兵衛らが相談して、戦死二十五人の遺体をよく調べ、これらを葬り、碑を建てて祀り供養にあたられた。この碑に、年の折々には土地の人々が線香を手向けて供養し、それは今日まで続いている。

大正十四年四月、私は兄と弟、金三郎と、初めて戦いの跡を訪れた。大木佐助ご老人は、私たち兄弟を案内し、当時の戦跡を指差しながら、伝えられている戦いの様子など、詳しく説明してくださった。それによつて、我が朝比奈家宗家父子の最期の様子を知らることができた。

その遺体の中で首のなくなっている者は、確かに寛政布であると認めたとはいふ。しかし、彼の死が明らかになつたが、その首が水戸へ届けられたという話は聞いていない。このころ、両村有志が相談して、弔碑を建てることになり、私にその碑文を書くように求められた。しかし、私は力の足りない者であり、どうしてこの大役を果たすことができようか、と迷つたが、私も朝比奈家の身内の一人であるので、有志の方のお求めに喜んで応じることにした。私の父・叔父、従兄弟にいたるまで、皆、困難で戦死してしまつた。今、ご老人のお世話で、我が朝比奈家本家一族が奮闘し、その戦没の跡を詳しく知ることができた。大木佐助ご老人は、七十歳を超えていらつしやるが、お体は極めてご丈夫で、記憶力もしっかりしておられる。どうしてこのような強い心身を保つことができるのであろうか。私はご老人といふ当地の皆様への深い感謝の気持ちと、申しわけないという複雑な心情で、その場を容易に立ち去ることはできなかつた。

【以下、戦没者の氏名を省略する。口語訳・文責 前沢 瑞穂】